

金田 晋のつぶやき (Facebook, 2021.11.12 より)

思い立って、自分の所有になる土地（荒地）の開墾をはじめました。雑草を刈り、鳥の落とした糞にまじった種子から成長した 5 メートルを超える高木をノコギリ一本で（チェーンソーを使ったことがないので）何本も伐り倒しました。身長は 5 cm 短縮し、往年の長身瘦軀は見る影もありませんが、腰一つ傷めず元気です。畑にはスーパーの野菜コーナーに種類こそ及びませんが、野菜がひしめいています。老いの独り作業で、コロナとは無縁な、ゆたかな生活ときめこんでいます。

一方で、2000 年大学定年退官後にはじまる大学経営職の末端をつとめています。日本の大学の疲弊、萎縮を嘆きながら、自分の堡壘は守ろうと頑張っています。なんとかならないか。大学が研究者たちの活みなぎる園になる時代に還ることを願っています。

近く、10 年ほど毎年通った対馬への拙稿（日韓の美術作家交流展「対馬アートファンタジア」感想）が、まとめて 1 冊の本になります。あわせて、今年で 9 年目に入った月刊誌「環境ジャーナル」への連載コラムも 1 冊の本になります。時代の輝きに感動しつつ、そこからはみ出される者の憤りをぼそぼそとつぶっています。

もう少し長期に及ぶ話。定年前から腰を据えて始めた「旧暦」へのナラトロジー。記紀や万葉集も読みました。車で 2 時間もかければ記紀の里に何時でも行ける。たのしい。太陰太陽暦である。月と関わる潮汐発電を提唱しているが、取り上げる政党もメディアもない。脱炭素の喫緊の時代、なぜ月のエネルギーを語らないだろうか。ぼくが生きている間に、世の中そちらに向いてくれないか。悲憤は青年時代とかわりません。

2 続きのつぶやき (Facebook, 2021.11.15 より)

多くの友人たちからの励ましに、フェイスブックもいいな、と思っています。名前が思い浮かぶとすぐにでも会いたいのに、すっかりご無沙汰していました。皆さん、お元気なのがいい。

ぼく流の畑づくりを紹介します。長い間、店頭に並ぶ野菜の大きさを求めて、野菜を叱咤激励してきた、「大きくなれ、大きくなれ。」でもあれは大人版だ。でも今は、子ども、あるいは青春辺りがいい。香りがあって、やわらかい。まだ売り物になっていない段階がいい。齢をとって思い出すのもその頃だ。思い出の中の少年や少女たちがいい。でもあつという間に、野菜は大人になってしまう。だからほうれん草もシュンギクも、カブも大根も一度に植えない。少量を、時間差で種子をまく。肥料も少ない目がいい。ただ振り返って、反省することも多い。子どもたちをもっとやさしく、いとおしく育てるべきだった。少年や少女の夢をもっと大切にしていけるべきだった。野菜でもそこが旬なのに。

庭木を剪定する。素人がするのだから、皆ふぞろい、トラガリだ。ただぼくはこうきめている。こちらから向こうの空が見えるようにするのがいい。こんでいる樹枝をのぞき込むと、下の方から光を求めて真っ直ぐ上方に伸びる枝がある。徒長枝（トチョウシ）とよばれるやつだ。まず切り落とさなければならない。それを切りながら、「コレハ昔ノオレダ」といやになる。枝の下側から外に出ようとする枝もある。これは、世の中もみ手をし、下手に出ながら、外に出て光を受けようとする。これは樹形を重くする。だから切り落す。樹間でゴチョゴチョしている枝も切る。そうしてゆくと、おのずと向こうに空が見える気持ちのいい樹形になってくる。もう一度生まれ変わるなら、徒長枝のような生き方をしなかったのに。独りで畑や庭木をいじっていると、植物の世界がいやに人間臭くなってくる。ほんとうはそれがだめなのだ、と思いつつ。

3 原野 昇のコメント (Facebook, 2021.11.15 より)

植物にもアニマあり。

少なくとも、人間の側からそうみることはできそうですね。

単なる見立てではなく。

4 続きのつぶやき (Facebook, 2021.11.15 より)

先便で徒長枝の悪口を書いた。自分を徒長枝になぞらえて、そんな自分がいやになる、と書いた。だが待てよ。樹はどのようにして大きくなる？光を求めて一気に伸びる徒長枝のおかげでないか。それが、本稿の反撃である。

一本の樹、樹相の表面は陽を浴びて陽を浴びていて今を謳歌している、内部に光を送ることなど考えようとしな。そのままの現在でいいのだ。だが光の射しこまない樹陰の枝にある新芽はどうするか、たいていは滅びる、あるいは委縮している。力を秘めた新芽が暗陰の間の微かな光をたよりに、表の枝葉の間を破って、さらにその先に自分を突き出してゆく。樹木の現在を破る。そのようにして樹は成長し、大木になってゆく。徒長枝の力だ。

何時から体制派になったのか。既に老いたか。かつて阿修羅の英気、いや殺気を放ちながら、暗部の向こうの光明を求めてよしとした気概はどうしたか。徒長枝に似た若木の気負いを忘れたか。そう思うと、切られる枝が無性に懐かしくなってきた。

「中国新聞」2021年11月20日号の1面下の広告に『庭仕事の真髓』（スー・スチュアート・スミス著、和田佐規子訳、築地書館）が載り、「Amazon 売行 No.1」、「全英ベストセラー」と紹介されている。かつてカレル・チャペックの名著『園芸家の12ヶ月』（小松太郎訳、中公文庫）が話題になった。庭よりも畑に近い。かつて18世紀フランス最高の知性ヴォルテールが1759年哲学コント『カンディードまたは最善説』を著し、その最後に「「お説ごもつともです」とカンディードが答えて終わる。「しかし、ぼくたちの庭を耕さなければなりません。」の1節で締めくくった。「庭の教訓」として知られている。すべて世の中はうまくまわっていると講釈する大学者パングロスの最善説に対する訣別の一言であった。その一歩の踏み出しが求められている。